女性サーヴァントしか召喚できないマスターの話をするとしよう

れべるあっぷ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一身上の都合によりこの作品は打ち切りとさせていただきます。

こんな駄作ですがお気に入り登録してくださった読者の皆様、ご迷惑をおかけしてたいへん申し訳ありませんでした。

尚、女性サーヴァントしか召喚できない系主人公の最新作

『先輩、ＡＴＭはカルデアにありません！』

を絶賛投稿中でございます。

ダブルマスター体制ではありませんが、時系列やらに縛られないカルデア・マスターと女性サーヴァント達との日常編になっておりますんで、

是非!!

是非に!!

是非ともご愛読の方よろしくお願いします。

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／１４０５７０／

目次

彼の話をするとしよう ―― 1
彼のスケジュール管理の話をするとしよう ―― 7
彼のグッドモーニングな話をするとしよう ―― 14
彼は子供相手にムキになる話をするとしよう ―― 21
彼の聖戦は確かに幕を閉じる話をするとしよう ―― 28
彼のお仕置きについて話せるなら話をするとしよう ―― 40
彼よりも我が王の話をするとしよう ―― 47

彼の話をするとしよう

うたかたの夢。
幾千もの星の数ほどありふれた夢。
この最果ての地で私は夢を見る。
日課であり趣味であり暇つぶしであり、これ以上にない極楽。
これは人理を継続させるために奮闘するカルデアの、二人目のマスターのとある苦難に満ちたお話しである。

☆

「あぁあああああああああっ!! ちくしょおおおおおおおおおおっ!! 出ないっ!! まったく出ないっ!! 欲しい鯖が召喚に応じてくれないっっ!! どうしてだ!! これは最早一種の呪いか!! あれか!! 人理修復するためにもっと課金しろってか!! 貢げってか!! でも残念ー!! 俺のカルデアには課金システムなんか搭載されておりませーん!! ダ・ヴィンチちゃんに課金システム作ってもらうしかありませーん!! 作ってくれないかなー課金システム!! 人類を救うためだ!! 全財産７５万ほどしかないんだが全額課金してもいいんだぜ!! えっ?? 足りないっっ?? 総人口約７４億人もの命を救うのにお前の全財産などたかが知れてる?? まっ、是非も無いよねっ!!」

冒頭から見苦しいのだが……

彼はこの世の終わりかのように絶叫していた。周り見ず、羞恥など一切お構い無しに、成人したばかりのいい大人が無様にも喚いていた。

それはいつもの見苦しい光景であった。

「英之助先輩、召喚システムに八つ当たりしないでください。それと

カルデアは貴方の所有物じゃありませんし、今召喚したばかりのサーヴァントに失礼極まりない態度です」
「そーですよ、英之助さん。デリカシーなさすぎ～」
「フォウ……」
　彼は共にサーヴァントの召喚を見守ってくれていた２人の少女と１匹の小動物（キャスパリーグ）に非難された。
「あ、あの、マスター……その……私じゃお役に立てないのですか……いえ、皆まで言わなくて結構です。その反応を見るからにどう見ても私じゃ役不足ですよ、ね……」
「あ、すんません。そういう意味じゃないんだ、ブリュンヒルデさん……もちろん、貴女様の力も必要ですともっ!!」
「さん付けはいりません……マスター。ですが、もう、私に優しくしないでください……」
「オーマイガー……」
　英之助さんサイテーと、野次が彼にトドメを差した。
「ブリュンヒルデさん、この人の発言はあまり気になさらないでください。いちいち気にしてると面倒です」
「そーそー、この人、こんなんだけどいろいろ事情があるだけだから。マスターとしての実力はそこそこ頼りにできるし……それに貴女も可愛がってくれるよ、きっと」
「だといいのですが……いえ、やっぱり困ります」
「フォウ……」
　少女２人によるこの人呼ばわりだとか、ただ相槌しかうたないペットは置いといて、四つん這いになってがっくりとうな垂れ意気消沈している彼はぶつぶつとイジケていた。
「また女性サーヴァントかぁ……どうして、いつもこうなんだろうなぁ……笑えるほど不幸だよなぁ……ふふっ、ふふふふふっ……」
「「「……」」」
　人理継続保障機関フィニス・カルデア――通称：カルデア。
　魔術だけでは見えず、科学だけでは計れない世界を観測し、人類の

決定的な絶滅を防ぐ為の各国共同で成立された特務機関。表面上は標高６，０００メートルの雪山の地下に作られた地下工房が彼らの活動拠点であり、英霊を使い魔（サーヴァント）として召喚し、今はたった２人しかいないマスターと共に未来を取り戻す壮大な物語が始まっていたのだが……

「ふふふっ、ふはははははははっ、ふわっはっはっはっはーーー……ファッキュゥウウウウッ!!」

「マスター、英之介先輩がついに壊れました!!　エネミーと判断し排除するのもやぶさかですが……っ!!」

「落ち着いてマシュ!!　これはいつもの発作よっ!!」

　ワケあってカルデアに召集されたマスター候補４７名の内、どちらとも一般人採用のごく普通の、青年の方が壊れた。否、いつものことであった。

「こ、これが……これからお世話になるマスターの、真の姿……っ!!?」

「フォ、フォウ……っ!??」

　今回なけなしの聖霊石でやっと出たサーヴァントもやはり女性サーヴァント。彼が守護英霊召喚システム・フェイトを回すと必ずといっていいほど女性サーヴァントしか出ない。

　それはもう１人の少女にも当てはまるのだが……

　現在のカルデアは職員を除いて、彼らマスター達の召喚に応じ馳せ参上したのは女性サーヴァントしかいないというのが現状だ。（職員の８割も女性）

　云わば、ここが桃源郷・カルデア。本来なら男性諸君には羨ましすぎるハーレム。ビバ・ハーレムっ!!

「マ、マスター、事情は大体把握しました。ですが、何がご不満なのですか？」

「うるせー!!　俺は知っているぞブリュンヒルデ!!　お前もその内、俺を誰かに重ねて合わせて恋わずらい発症させるんだろ!!」

「そ、それは……いささか、自意識過剰じゃありませんか??」

「じゃあ俺の目を見て言ってくれ!!　シャレになってねー!!」

　初めは彼もうひょ～ハーレムサイコーと、欲望にまみれたブタみた

いな男だった。
しかし、現実は甘いようで甘くなく、彼の理想郷は潰えて、いつしか男性サーヴァントを欲っするようになっていた。（ホモではない）
そして、その理由が、彼が女性サーヴァントに敏感に反応する脅威が、ついにやってきた。
「「うふふ、ますたぁ♥」」
「……」
彼がサーヴァントを召喚するためにココにいることは、他のサーヴァント達も知っている。
またマスターがどこぞの女性サーヴァントを召喚することは彼女らにも知れ渡っている。
「あらあら、これはこれは……またお綺麗な方をナンパ……もとい、またお持ち帰りしてきたのですね。母は悲しいです……とっかえひっかえ、誰彼問わず小娘に夢うつつを抜かす息子に育てた覚えはありません。およよ……」
「……」
彼は貴方の息子じゃありませんよー。
「マスター、男性サーヴァントを召喚するとおっしゃったじゃないですか、また嘘をつきましたね。これで何度目ですか……うふふ、嘘をついたらどうなるか、約束しましたよねぇ？」
「……」
さて、どうなるんでしょうね……。
「マスター。あんな女よりわたしのこと、いっぱいさわってください」
「……」
いろいろアウトォォオオオオ!!
主人公よりも欲望にまみれたな肉食系サーヴァント3人衆が素早く彼を包囲した。
「ま、まあ、待ちたまえ君たち、話せばわかる。冷静になれ、状況を見ろ、いつも言っているだろ？　暴力では何も生まれない。解決できないこともあるんだよ!!　そうだろ!!」
「うふふ、だからマスターのお部屋でお話しするのではないですか」

「お話しするだけなら縄はいりませんよね頼光(らいこう)さん!?　新たな宝具開発でも試みるつもりなんですかそれは!?」
「あらやだ、母にマスターの息子を開発させるだなんて、困った子ですわ……」
「いやいや、アンタどんな耳しとるんだ……っ!!?」
「それよりマスター、頭撫でてください」
「静謐(せいひつ)ちゃん、今それどころじゃないからね!!」
「ささっ、わたくし達の愛の巣に参りましょう。今日は寝かせませんからね♥」
「きよひー、その手に持ってるのは?」
「はい、マムシドリンクです♥」
「それはアカン……」
「マスター撫でてください」
「た、たすけて、ブリュンヒルデもん!!」
「え、と、その……」
「新参者、わたくし達の邪魔をしないのであれば、マスターの取り扱いをレクチャーしてさしあげますわよ?」
「耳を貸すなブリュえもん!　俺の味方をしてくれたらお前の大好きな邪ンヌお姉様の寝室へ案内しよう!!　そうだ、俺の権限で同室にしてもらえるよう邪ンヌお姉様に頼んであげてもが……っ!?」
「撫でて、ほしいです……」
　彼の口は奴等の手によって塞がれた。
「「御託はいいですからマイルームに行きましょう、マスター♥」」
「んんんんんゆー……っ!?」
　人理の特異点を既に五つも修復した者の扱いとしては、なんともムゴい。
「流石サーヴァントとの絆レベル１０なだけあるよねー」
「絆メーター振り切ってますけどね……」
「じゃ、マシュ、私達も部屋に戻ろっかー」
「はい、先輩♪」
「フォウ……」

こうして今日も今日とて平和な？　カルデアの1日は過ぎ、夢から私も覚める頃合だ。

☆

さて、今日の話はここまで。
また明日、気が向いたら…いや、彼が生きていたら彼の話をするとしよう。
私が夢で見た、カルデアの二人目のマスター・逢道英之助（あいみちあいのすけ）くんの女難に満ち溢れた物語を、ね。
ただ、一言言わせて貰えれば、男性サーヴァントが召喚されても現状は変わらないだろうけども。

彼のスケジュール管理の話をするとしよう

朝７時ジャストに彼の部屋へ訪れるサーヴァントをご存知だろうか。

否、侵入してくるサーヴァントと表現した方がいいのだろう。たとえ、鍵を掛けていようがセキュリティを強化してようが、扉を宝具でぶち破ってくるサーヴァントを諸君らはご存知だろうか。

「不撓燃えたつ勝利の剣（セクエンス・モルガーン）っ!!」

「なにごとーーー!??」

マスターの部屋を破壊してでも侵入するサーヴァントはいくらでもいるが、毎日決まった時間に律儀に真面目に一秒の誤差なくやってくるのは彼女だけだ。

彼に理想の生活を強要する黒を基調としたメイド姿の少女。

彼の最初のサーヴァント。

モップで戦うメイドさん。

通称、メイド・オルタ。

「起きろ、ご主人様。朝だ、二度寝は許さん！」

「」

奇妙なことに我が王の別側面から現存する、アルトリア・ペンドラゴン・オルタの姿がそこにあった。

彼の女難はここから始まったのだろう。

☆

未来観測領域の消失。

人類史は２０１６年をもってして終了することが判明した。

これに対して人理継続保障機関カルデアは本来観測されるはずがない過去の特異点、２００４年に聖杯戦争が行われた冬木に原因があ

ることを突き止め、原因の解明に４７名のマスター候補を現地に送り込みファースト・オーダーを発令した。
が――――、事件が発生した。
カルデア内にて爆発事故、その場に集められていたマスター候補や職員が巻き込まれ死傷者を出す大惨事となった。
マスター候補４７名の内４６名が永久凍結を余儀される中、なんとも皮肉なことに、生き残ったのは一般人採用で召集された藤丸立夏という少女だ。そんな彼女とカルデアにいたサーヴァントと融合を果たし生き延びたマシュやレイシフトに巻き込まれた所長のオルガマリーと共に、カルデアからドクター・ロマンのバックアップの下に冬木の町の調査をすることになった。
途中で聖杯戦争の唯一の生き残りである光の御子、クー・フーリンと共闘関係を結び迫り来る脅威を排除していった。
人類の命運をかけたそういう物語。
でも、違った。
まだ、彼が登場していない。
そう、まだ彼の物語は始まっていなかった。
「ほう、面白いサーヴァントがいるな」
「先輩、目標サーヴァントを確認。ラストバトルです。戦闘開始します……っ!!」
彼の物語はここから始まる。
舞台はいきなりクライマックス。特異点の原因であり、洞窟内で大聖杯を守っている敵サーヴァントと対峙した。聖杯によって泥に染め上げられた我が王（セイバー・オルタ）とマシュが宝具を展開する。
「約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガーン）――――――っ!!」
「人理の礎（ロード・カルデアス）っ!!」
お互いの宝具が激突した。
暴力的な魔力の塊がマシュを襲いかかり、対してデミ・サーヴァントであるマシュは融合したサーヴァントの真名もわからない状況下で仮想宝具の疑似展開で対抗してみせた。
だから、彼はそこを狙った。

今から思えばこれも彼の計算の内だったかもしれない。
洞窟内に響き渡り唸り狂うエンジン音。暗闇に紛れていた漆黒のマシンが姿を現した。大型二輪のバイクに跨っているのは見たことのある顔のメイドと、見たことのやるような、どこにでもいてそうな面をしているが、不適に笑う青年。それはまるで招かざる客がおこがましくも現場に押しかけたように、誰もが彼らの登場を予期してなどしておらず――――、
「「「え、誰――――っ??!」」」
ヒーローは遅れて登場した。そして、メイド長は狙撃銃を構えた。
「令呪を持って命ずる。宝具の解放だ、メイド・オルタ……っ!!」
「承知した、ご主人様――――――――洞窟内を駆けるは不撓(ふとう)の魔弾。ロック！　不撓燃えたつ勝利の剣(セクエンス・モルガーン)――――――っ!!」
まさか、藤丸立夏以外のマスター候補がここへレイシフトいたとは誰も予想がつかなかっただろう。
まさか、あの地獄を自力で生き延びサーヴァントを召喚していただなんて想像もつかなかっただろう。
まさか、敵も宝具ぶっぱしている横腹を同じ顔のサーヴァントに狙われるとは思ってもみなかっただろう。
「ぐぅ、私の顔真似したライダー風情が……つけ上がるな……っ!!」
クラス補正もあってセイバー・オルタはかなりのダメージを受けるもしぶとく生きていた。
そして、ターゲットをマシュからメイド・オルタ及び彼に変更し、また宝具を解き放つために漆黒に染まる聖剣を天に掲げた。
先ほどよりもさらに膨大な魔力を収束していく。
「私たちの時は本気じゃなかった……っ!?」
「駄目、避けて――――っ!!」
「いや、俺たちの勝ちだ!!」
セイバー・オルタの宝具が発動するよりも先に2人は動いていた。
宝具(ビーム)を放つのではなく、宝具(マシン)で敵に突っ込んでいった。セイバー・オルタはそれを受け止め――――たまらず、しがみつくことしかできなかった。

「ぐぅ……まだわからないのか、これでは私を倒せないと……」
「わかってないのはお前の方だよ。俺たちの勝ちは揺らぎはしない。そうだろ、キャスター……っ!!」
「あー坊主、そういうことかよっ!!」
洞窟前で敵サーヴァント・アーチャーと殺り合っていたクー・フーリンが駆けつけて、宝具を発動させた。
「灼き尽くす炎の檻（ウィッカーマン）――――ッ!!」
セイバー・オルタの背後に展開された、巨大な人型木人形の胸元にある扉を開き、そこにフルスロットルで突っ込んでセイバー・オルタを押し込んだ。
「「「「お前らも入るのかーい!!?」」」」
勢い余って彼ら3人仲良くマシンごとウィッカーマンの中へダイブしていった。
思わずツッコミを入れてしまうぐらい衝撃的な光景だったに違いない。キャスターもキャラ崩壊待ったなしレベルだ。
「アイツ、バカなの!?」
「バカがいる！　本物のバカがいる!?」
『彼の身元が判明したよ。マスター候補の1人、一般人枠の逢道英之助（あいみちあいのすけ）くんだ。たぶんバカだけどね』
「先輩も所長も、ドクターも彼らの心配してください!!　でも、あの人たちきっとバカです!!」
バカだバカがおるぞ、と2人に悪態をつくカルデアメンバー諸君。
「あー、嬢ちゃんたち。その馬鹿共が、いや、坊主はメイドに担がれて無事脱出したみたいだぜ。馬鹿だけどな」
なにはともあれ、彼らはウィッカーマンの中で敵とやり過ごし、上手く自分達だけ脱出することに成功したようだ。
『所長、敵サーヴァントの消失確認しましたっ』
「本当に倒したっていうのっ!?　うそ、信じられない、あんなのがっ!?」
敵の黒い方の我が王も不憫でしょうがないけども。
彼女はウィッカーマンの中から脱出することができず炎の檻の中

に囚われ焼却された。
トドメを差したのはクー・フーリンではあるが、敵サーヴァントを追い詰め追い込んだのは、その一役を担ったのは間違いなく彼ら。あんなの呼ばわりの彼らだ。
「ふっ、君達、怪我はないかい？」
「「「……」」」
格好つけたい年頃なのだろう。２０歳だが。
彼は遅れてきたヒーローを演じ、爽やかな笑みを見せ、カルデアメンバーに声を掛けた。米俵を担ぐようにメイドに担がれる彼は後ろを向いていたけども。
格好つけようとして初めて羞恥を知り、人は強くなっていくとも言うだろう。
「こ、これにて一件落着っ」
「清掃完了。メイド稼業も悪くはないが、オチもないがな」
「フォウ……」
やれやれ、とキャスパーリーグが皆を代弁していたことが、またシュールだったけどね。
こうして彼の物語は始まっていく。
まるで、これを序章にして、邂逅にしていくように……星の導き手に導かれ、彼らの運命が今決まった。
ただ、まだこの時までは後に起こる悲劇を誰も彼も知る由もなかった。

☆

「では、本日のスケジュールを伝える」
回想も終わり、あれから幾ばかりか日も経ち、彼女との絆も深まりし、深まり過ぎた彼の朝は今日もやってくる。

「午前７時１５分に朝食」
「おけ」
「午前８時から朝の稽古」
「うん」
「午前９時からブリーフィング」
「うん」
「午前９時半から正午までレイシフトにて種火周回」
「うん……」
「正午０時に昼休憩。昼食を取れ」
「おけ」
「午後１時から周回の続き」
「うん……」
「午後４時から騎乗稽古」
「う～ん……」
「午後５時からブリーフィング」
「うん」
「午後６時からフリータイム」
「おけ」
「午後７時から夕食」
「おけ」
「午後８時から入浴」
「あ、うん……」
「午後９時には就寝……」
「俺は多忙な小学生かっ!!」
　多忙だが、午後９時就寝というのがミソだ。
「おっと失礼。午後９時からダ・ヴィンチちゃんの座学コーナー」
「うんこ。もう一度言うがアレはうんこ……」
「午後１０時から夜の騎乗稽古。今夜は私の番だったな、ふふっ……」
「やだ……」
「午後１２時、就寝」
「つ、辛すぎるぜ、カルデア」

徹底的なスケジュール管理。メイド長による逢道英之介掌握術。
理想の生活は、実現されつつあった。
「それではご主人様、本日も理想のために強く生きましょう」
「」
彼は、もう何も言うまい。

彼のグッドモーニングな話をするとしよう

彼は背伸びをした。
瞼をこすり、欠伸をして背伸びをした。目覚まし時計の如く、メイド・オルタの来訪で幾分かは目覚めも悪いが、まだ眠たそうだ。
朝食のために食堂へ向かう。
その足取りはおぼつかず、ただ単純に先のダメージが響いているだけなのかもしれないが、やはり今日までの疲れが溜まっているだけなのだろう。
ここは桃源郷・カルデア。
人理焼却を防ぐために、一般人でしかない青年少女に全てを託し、命を掛けた戦いを繰り広げる人類最後の特務機関。
しかし、青年の疲労はそれだけじゃなかった。
彼にとって人類史を救うことより、サーヴァント達と円滑なコミュニケーションを計る方が超高難易度ミッションじゃないだろうか、という現状問題。
魔境の地・カルデアとも言うがな。
世知辛い環境下になったな～、と彼はため息をついた。
ぼんやりと外を見れば猛吹雪の悪天候。心も沈むってものだ。
「ふわぁ～い、英之介さんおはよー」
「あぁ、おはようさん。立夏……。」
彼にとっての救いはカルデアにはたくさん良識のある人たちがいること。たくさんの癒しがまだ残されていること。慰めてくれる人がいるということだ。
変なのは彼と彼の周りだけ。
同じマスターである藤丸立夏は至って普通。男のサーヴァントはいらない！　美少女だけでいいのよ！　と宣言するぐらいのジョークを言える女の子だということ。
うん、普通だと思う。
「あれ？　マシュは??」
「起きた時にはもういなかったかなー。なんか、今日の朝早いからっ

て言ってたのは聞いてたんですけどー」
「そうかいそうかい、それで立夏はパジャマ姿のまんまなんだな」
　このスットコドッコイ、と彼は笑うことにした。
「あ、もしかして～、私のパジャマ姿に欲情してくれたり？」
「ふっ、お嬢ちゃん。ボタンが一個ずつズレてるぜ」
「きゃっ。やだ、エッチ、スケベ、頼光さんにチクっちゃうぞ♥」
「……」
「まーそんなことよりも。英之介さん、随分のんびりしてますねー……早く行かないと!!　朝ごはん!!」
「こらこら、手を引っ張るもんじゃないよ、君。落ち着きたまえ。朝ごはんは逃げないさ」
「何を言ってるんですか、このスットコドッコイ!!」
「俺がス、スットコドッコイ……」
　今日日（きょうび）、スットコドッコイなど聞かないが。
「腹ペコ王達に朝ご飯全部食べられてもいいっていうんですか!!」
「それは困る!!」
「なら早く行きましょう!!　ほら駆け足!!」
「だが断る!!」
「なんでさ!!?」
「小便行ってくる!!」
「サイテー!!」
「俺の席も取っといて、よろしくー!!」
「ふざけんなー!!　だけど、そんなとこも素敵だと思いますよ!!　たぶん!!」
　だけど、この借りはいずれ……と、彼と廊下で別れた後に少女は悪い笑みで呟いた。
「ぐふふっ、今度はどんな悪戯で英之介さんを困らせてやろっかな～♪」
　そんな声も聞こえた気がする。

☆

部屋を出る前に何故用を足さなかったと彼らは言う。
「あ、子イヌだ、おはよー……って逆走してどうすんのよ。食堂行くんでしょ？　あっちよ」
「おはよーだ、エリちゃん。だが、食堂にはまだ行かない！　あばよ～!!」
「なんでよ!?」
タッタッタッタッタ……。
カルデアには職員用のトイレもあるが、現在位置からは彼の自室の方が近かった。ので、すれ違う者たちに逆走していると解釈されてもおかしくなかった。
「あ、マスターだ。おはー」
「英之介さん、おはよー」
タッタッタッタッタ……。
健康的な褐色ロリ……もとい、彼が召喚したサーヴァントと、それに対をなす、オリジナルの少女サーヴァントとすれ違った。
「クロエにイリヤちゃん、おはー」
「あれ、どこ行くのー？」
「食堂はあっちですよー??」
「うふふ、お花摘んでくるのよー」
「あ、うん、あっそ……」
彼のオネェジョークは少女たちに不評だった。最近の小学生はドライであった。ちなみに、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは少女・立夏の召喚に応じたサーヴァントである。
「ああん、お姉様ぁ～、私を置いていかないでくださいまし……っ!!」
「ええい、くっついてんじゃないわよ、まったく……」
タッタッタッタッタ……。
そして、また別のサーヴァントとすれ違った。

「よっ、邪ンヌにブリュえもん。今日も仲がいいな、おはよーさん」
「あ、ちょっとアンタいい所にって……誰のせいだと思ってんのよ!!
ってちゃんとアタシの話聞きなさいー!! 食堂はあっちよー!!」
「あああああああああシグルドお姉様ぁぁぁあああああああ!!」
「アタシはシグルドじゃないっってんでしょうが!! シグルドはあの馬鹿よ!!」
タッタッタッタッタ……。
去っていく彼の背中に向けて指を差す。
「え、それは本当なのですかお姉様っ!?」
「え、ええ、本当よ……アタシが嘘をつくはずがありません」
顔を逸らし、しかし、嘘を真実にしてしまえばいいのよと黒い方のジャンヌ・ダルクは自分に言い聞かせるのであった。
「あら、マスター?」
タッタッタッタッタ……。
「ら、頼光さん、おはようございますです」
タッタッタッタッタ……ダダッダッダッダダダダダッ……ガシッ!?
「はい、おはようございます。今日も朝からお元気がいいのですね」
彼は腕を掴まれた。
「ですけど、廊下を全速力で走っては危ないですよ。転んでお怪我をなされたらどうなされるんですか?」
「いやいや、ちょっと過保護過ぎやしません? ガキじゃあるまいし、そんなもん、俺ぐらいのレベルになれば受け身ぐらいとれますよ」
「うふふ、それでも母はマスターのことが本当の我が子のように心配なのですよ」
「あ、うん、ども……」
なかなかのレアだ。素でテレる彼は珍しい。
しかし、彼は気になったことがあった。何故、この母は手を離してくれないのだろか、と。
「あー、まーあれです頼光さん。諸事情につき急いでたんですよ」
「あらあら、今は朝食を摂るお時間ですものね。しかし、マスターは血

相を変えるほど急いでいた。さては、何か忘れ物を取りに自室へ向かうつもりだったんですか？」
「そ、そう！　それ!!　頼光さんは俺のこと何でも知ってるね!!」
「うふふっ、嫌ですわマスター。母として当然じゃないですか」
「と、当然なんだ……」
　母の腕力に勝てない。ずりずりと引き寄せられる。
「母は息子のことなら何でも知っているものです。世界万国共通概念ですよ、マスター」
「ら、頼光さんがおっしゃるならその通りなんでしょうね」
「ですから、マスターが嘘をついているのも直ぐに見抜けるというものですよ。本当はお手洗いに行かれるのですね」
「……」
　彼のことは何でも知っているというか、もはやエスパーだ。
「ささ、マスターのお部屋に戻るよりもわたくしのお部屋をお貸しします。どうぞ、中へ」
「」
　呼び止められた場所は頼光の部屋前だったということ。それだけは不味い。
「どうなされました？　さあ、早く……早く用を足して食堂へ向かいましょう。母が見ていてあげますから」
　もうそれは罰ゲームなのでは？
「今さら何も恥ずかしがることはないというのに。およよ、母は言う事を聞いてくれない息子をどう説得すればいいというのでしょうか」
「いやいや、いろいろ誤解はあると思うんだけど、頼光さんの好意も嬉しいんだけど、俺の部屋に戻る用事があるってのも今思い出したんだって。そう、あれだ、スマホ。スマホ持って来るの忘れちゃって……えと、立夏の奴が寝ぼけてパジャマ姿で食堂行ったんだよ。それを写メってからかってやろうと思ってさ。で、ついでにトイレも行っときたいなーって」
「あらあら、そういうことだったのですか。てっきり、母の寝室には入れるか馬鹿野郎とグレたのかと思って……およよ」

「そ、そんなんじゃないって!! それに頼光さんには重要なミッションをお願いしようと思ってさ。立夏には席取っといてって言ったけど、本当に取っといてくれるか分からないから信頼できる（戦闘に限る）頼光さんにお願いしようかと……」
「うふふっ、それならそうと早く言ってくだされば、いいのに。わたくしめを頼りにしてくださるなんて、もう嬉しゅうございますぅ♪」
「ごは……っ!?」
思いっきり抱きしめられた。ダメージを負うほどの母（バーサーカー）の愛が彼を包み込んだ。

☆

さて、マイルーム前。
「ぜーぜー、やっと辿りついた……」
あの後、自室までのコースを変更した。なにやら不穏な気配（きよひー）をいち早く察知した彼は遠回りをして自室へ戻ってくるのであった。
しかし、
「なんだこりゃっ!?」
「むっ、その声はご主人様か？」
驚くのも無理なかれ、破壊された今は亡きドアがあった入り口には清掃中の看板が立っている。
どこぞの清掃業者の陰謀論でも渦巻いているかの如く、現在自室はダ・ヴィンチちゃん印の洗浄マシーンが床を水浸しにしているのであった。それをメイド長がモップで拭き取っているという具合に……
「貴様、何をしている？」
「そのままそっくり返させてもらうぜ。貴様こそ何をしている??」

「見ての通り清掃中だ。ドアが大破してしまったからな」
「お前が壊したんだよバーロ!!」
何も悪びれることのないメイド長。
ドアを破壊しただけで水浸しにしてまで清掃することなかっただろうに。ついに彼も我慢の限界だった。が、メイド長が逆ギレした。
「おい、貴様っ!! 清掃中に土足で入ってくるなっ!!」
「いやっ、ここ俺の部屋!! 便所行くだけだって!!」
「それも駄目だ!! 共同トイレへ行けっ!! 汚れに汚れきっている貴様のトイレを『ダ・ヴィンチちゃん印・便所掃除もコレ一本で楽々☆クリーンバスター』でもっぱら浄化中だ!!」
「なんでお前がキレてんだよ!? つーか、なんかトイレのドアがガタガタいって泡漏れてんですけど!? おいおい本当に大丈夫なんだろうなっ!??」
「ふっ、案ずるな。貴様が朝の稽古を終えた時にはキレイさっぱり真っ白になってるだろう」キリッ
「それってトイレが吹き飛ぶとかそういうオチじゃないだろうなっ!??」
「そんなことより朝食をさっさと取って来い。このスットコドッコイめが!!」
「……」
チクショー、と彼は現実逃避してその場を去るのであった。
頑張れ、英之介くん。

彼は子供相手にムキになる話をするとしよう

この世の中には大人気ない大人なんてどこにでもいるものだ。
たとえば子供の悪戯を笑って許せない大人がいたりする。たかがカンチョー如きにマジギレする大人がいたりする。
というか、このカルデアにもいた。
そう、すなわち彼だ。
「いや、俺だってわかってるんだぜ。たかがガキんちょ共の悪戯だってことはよぉ。マジにキレるほどでもないってことはわかっているんだ。普通の挨拶じゃ飽きたんだろうよ、たまには違う挨拶をして刺激が欲しかったんだと思うんだ。俺がどんな反応するか見てみたかっただけなんだ。俺がどんな挨拶を返してくれるか期待していただけだと思ったんだろ？　そうなんだろ？　あぁ、分かってるさ。そんなこと分かっているとも。お前たちはどこまでも純粋でどこまでも無邪気で、たとえ俺のサーヴァントじゃなくても可愛い奴らなんだ。俺もホント大人げないとは思うわー。俺も笑ってお前らと挨拶交わしたかったわー……でもなぁ、カンチョーだけは話は別なんだよ!!」
「「……」」
指で印を結び、忍法・カンチョーの術の構えをしてぶつぶつ言っているのは、人類史を救う者の姿には到底見えなかった。
まず、何故こんなことになっているか、説明は必要だろうか。
早い話、彼が用を足して食堂へ向かう途中にとある子供サーヴァント3人組出くわし、挨拶にカンチョーされて激オコなわけである。
まぁ、子供だろうとサーヴァントである彼らにカンチョーされるのは危険も伴うだろう。だけど、彼が腹を立てているのは相手がサーヴァントだからではなく、子供にやられたから怒っているのだ。
だから、大人気ないという話。
もう一度言うが、これから世界を救う英雄になる男には到底見えなかった。
「お前らさ、カンチョーの恐ろしさナメてるだろ？」

「そ、そんなことないよ？」
　相手がかの有名な切り裂きジャックであろうと容赦しないだろう。
「お前らはさ、カンチョーされた奴の気持ちを考えたことないだろ？」
「お、お兄さん、おめめのハイライトが無くなってきてるの……っ!?」
　相手が童話の少女だとしても手加減しないだろう。
「お前らは一体全体、俺をまたあの暗黒時代に戻すつもりかよ。俺はこれからお前らにウンコたれと指差されて人理修復していくんだろうな!!」
「なんの話ですか!?　ちょっと落ち着いてください!!」
　相手が聖女様の黒くてちっこい女の子であろうと泣くまでお仕置きするだろう。
「トナカイ2号さん、わかりました！　私たちが間違っていました！
　論理的にいって、ごめんなさい！」
「ご、ごめんなさーい」
「もう謝っても許さん！　ケツをこっちに向けてパンツを脱げぇい!!
　俺様のゴッドフィンガーの餌食にしちゃる!!」
「ふえ!?　それはロジカル……もといセクハラですよ!!」
「セクハラ？　それは違うな、オルタちゃん。これは教育だ。君達が挨拶をして、俺もその挨拶に応える。君達は社会をちゃんと勉強しなくちゃならない。じゃないとロクな大人になれないからな」
「でも大人気ないお兄ちゃんはロクでもない大人のような……」
「シャラップ!!　ジャックちゃんも言うようになったねぇ。でもな、ちゃんと挨拶をしたら相手の挨拶も受け止めなくちゃならない。その基本もできない大人だけはなったら駄目だよ!!」
「であればパンツまで脱がなくても……っ!!」
「じゃあパンツ越しからだったらいいんだな？」
「あっ……今のは違うんですっ／／／」
「はい論破!!　もう弁解の余地もありませーん!!　ほらっ、さっさとお尻こっち向けて突き出す!!　オルタちゃん、早くぅー!!」
「ふぇえ……／／／」
　なんだか楽しそうだね、彼。

なにはともあれ、世界を救う前にいろんな意味で彼を救ってあげた方がいいと思うけどね。でも、私の心配には及ばなかった。
童話の少女が決死の覚悟で持っていた分厚い本を、この人類悪へ叩きつけた。
「ぐげーっ……おい、普通に痛いんですけど!?」
「皆、今の内に逃げるの!!」
「うん、わかった!! オルタちゃん、早く行こっ!!」
「は、はい……っ!!」
「おい待てガキども!!?」
ジャック・ザ・リッパーに手を握られたオルタ・リリィ。
子供たちは二手に分かれてこの場から去っていった。
1人、ポツンと取り残された彼は惨めな気持ちになった。自業自得はいえ、あまりにも惨めだった。もう子供たちのことは放っておいて食堂へ向かい朝食を取るべきなのだろう。
でも、彼にはできなかった。
できない理由があった。
それは子供の頃のトラウマがあったからだ。
「目には目を、歯には歯を、浣腸には浣腸を……」
彼は子供たちのお尻を見たいワケじゃない。ロリコンではない。
彼はカンチョーによって引き起こされる悲劇があると子供たちに伝えなくちゃならなかった。
だから、彼は何がなんでも子供たちにカンチョーをやり返すと決めたのだ。
「ふはっ、ふははっ、ふはははっ、ふはははっ、ふはははっ、ふはははっ、ふはははっ、ふはははっ、ふはははっ!!」
彼は高らかに笑い、子供たちの後を追いかけた。

☆

さて、聖戦の幕開けである。
まず、彼が向かったのは何故かロマニ・アーキマンの部屋だった。現在のカルデア内医療トップにして、もっとも権力のある三十路間近の独身男の部屋へ訪れた。ヒトは皆彼のことをドクター・ロマンと呼ぶ。
「やあ、おはよう英之介くん。朝から僕の部屋に遊びにくるなんて珍しいね」
「そうでもないさ。ロマンの部屋の前にこんなもんが落ちていたんでな」
「おや？　彼女のしおりだね、それ」
それは読書の時に使われている本の栞だった。
童話の少女ナーサリー・ライムがよく愛用しているものだと一目見てわかるものだった。それを落とすなんて無我夢中で逃げ場所を探していたのだろう。
彼はドクター・ロマンにことの成り行きを説明した。
「俺も大人気なかったとは思う。だから、俺が怒っていたワケを説明してガキんちょ共に分かってもらいたいんだ」
「なるほどね。君の気持ち、ボクにもわかるよ。ボクもそっち側の人間だったからね。引越しするまで、そりゃ汚名を被った暗黒時代だったものさ」
「おお、俺の気持ちもわかってくれるのか。流石はロマンだな」
「というか、サーヴァントにカンチョーされてお尻は、その、痛まないのかい??」
「ふっ、俺はあの暗黒時代があったからな、二度とウンコを洩らしてたまるか根性でケツ筋鍛えてたからな……それなりに平気だぜ」
「そ、そうなんだ……」
「それじゃあ、ナーサリーを出してくれ」
「え、いやいや、それはできない。ナーサリーはここにはいないからね」
「ふむ……」

考える素振りをするや否や、彼は素早く行動に移した。
ただ、当てが外れたか、彼は遠慮なく非常識にもクローゼットを開いてみたが、童話の少女の姿はなかった。マギ☆マリのグッズで散乱しているだけだった。
他にもトイレ、ベットの下、デスクの下、漁れるところは全部漁った。
「ボ、ボクのこと、ちょっとは信用してくれてもいいんじゃないかなー……」
「信頼はしてるさ。だけど、ロマンがちょっと席外した隙をみて侵入してる場合もあるだろ？　ロマンは何も知らなかった……ってな」
「そ、そうだね……」
「あーここだと思ったんだけどな。他あたってみるわー」
「あ、その栞は……??」
「人質は必要だろ??」
「……」
童話の少女は栞を返してほしければ、必然的に彼の前にもう一度顔を出さなければならなくなった。これで1人目を抑えたのも同然である。
で、デスクに置かれたドクター・ロマンのイチオシのお菓子を1つ、2つ、ひょいと手に取り、その場を後にするのであった。
「あっ、ボクのお菓子……」
「……」
無常にもドアの閉まる音だけがした。

☆

さて、残り2人はどこへやら。
この広いカルデア内で始まった鬼ごっこ、又は、かくれんぼ。それ

は果てしなく壮大で大変だ。だけど、案外すぐに決着するだろうと彼は読んでいた。
何故なら、彼は1人で子供達の相手をする気など、さらさらなかったからだ。
「静謐ちゃん。俺の可愛い静謐ちゃんはどこー？」
「マスター、お呼びですか？」
ぬっ、と背後から姿を現したのは彼のサーヴァントのアサシン。隠密行動に長けたサーヴァント。
日頃から暗躍しているだろうから、彼がこれまで数々の特異点を生き延びてきたのも彼女の活躍は大きいわけだが。時たまバーサーカーの狂気に当てられて手を焼くこともあるのだが、それはまあ置いといて。
彼は勝負に勝つためなら手段を選ばない。
彼は彼1人で子供たちを捜していると見せかけてでも、この勝負に勝つつもりでいた。いや、もうなんの勝負かわからないのだけど。
「静謐ちゃん、ロマンの部屋にナーサリーちゃんいなかったね」
「それは……」
彼をがっかりさせてしまったと思い、しょんぼりする静謐のハサン。
彼は落ち込む彼女の頭を撫でてあげた。
「あ、いや、別に責めてるわけじゃないんだぜ？　静謐ちゃんの言ったとおり、確かにナーサリーちゃんはロマンの部屋の中へ入っていった。ロマンの奴、栞を見ただけでナーサリーちゃんのだと決めつけやがったのもアレだな。じゃあ、彼女はどこへ隠れたのでしょうか、って話だ」
彼はちんまい女の子が隠れられそうな所はくまなく探したはずだった。
「であれば、霊体になって隠れた可能性があります」
「もしくは、彼女自身が本になった可能性もあるぜ」
「マスターは机の下じゃなく、引き出しの中を探すべきでした」
「まあ、いいさ」

彼がその答えに辿りついた時にはドクター・ロマンの部屋を出た時だった。もう一度、中に入って本棚や、デスクの引き出しを片っ端から探すこともできただろう。

しかし、彼はそれはしなかった。

リスクが高かったからという理由もある。あまり追い込み過ぎると返り討ちをくらう可能性もあった。

その場合、彼はひとたまりもない。

だから、彼女には一時の安心とまだ彼が彼女を狙っているという緊張感を与えるだけに留めた。それだけで良かった。

もうすでに勝利の方程式も彼の頭の中で完成されていた。

子供3人相手だろうと全力を持って狩るのみだ。負ける要素は一切無し。

「静謐(せいひつ)ちゃん、次はジャックちゃんだ」

「はい、マスター」

さあ、大人気ない彼の物語はまだ終われない。

とにかく逃げて、ジャック・ザ・リッパー。

彼の聖戦は確かに幕を閉じる話をするとしよう

仕込みは万端。
勝利の方程式は確約された。
彼のカンチョーに対する並みならぬ執念により、大人気なく、容赦なく、徹底的に子供たちを追い詰めていく。
彼が次に訪れたのは工房だった。
「やあ、ダ・ヴィンチちゃん工房へようこそ」
ここは、天才を自称するサーヴァントの有する工房だ。
「おはようだ、ダ・ヴィンチちゃん。いきなり本題だが、ここにジャックちゃん来てない？」
「ん？　突然藪から棒に人探しかい？　ジャックちゃんがどうかしたのかい？」
「あぁ、聞いておくれよ、ダ・ヴィンチちゃん」
彼はドクター・ロマンにしたように事の経緯を説明した。
「ふむふむ、それは大変だったね英之介くん。カンチョーだけは確かにムゴい」
「おぉ、ダ・ヴィンチちゃんも俺の気持ちわかってくれるのか！　お前、ひょっとして俺やロマンと同じコッチ側の人間だったか!!」
「否、私は君達と相対するアッチ側の人間だったね」
つまり、カンチョーをするイジメっ子側の人間。
「そんなバカな……お前、俺の気持ちわかってくれたじゃん!!」
「だから、幼い頃は同い年の男の子を片っ端からカンチョーしていって全員ウンコたれの称号をくれてやったのさ」
「お前はとんだ悪ガキだったんだな?!」
「ふふっ、まぁ悪ガキだったからこそ、それ相応の報いを受けたのさ。もう二度としません、ごめんなさい、お母さん。だ」
「……」
だから、君の気持ちがよくわかる、と天才は言う。
だからこそ、君はカンチョーに執着しているとも言う。
「カンチョーをやった者は罰せられる。今ここで子供たちを止めなけ

れば、手に負えないそれ相応の手痛い報いを受けるだろう。だから、君はそうなる前に、子供たちをちゃんと叱って許してやるべきだ」
「うんうん、そうだよな。やっぱりちゃんと怒ってやらないと駄目だよな」
「限度ってものもあるけどね。ほどほどに、ね。それでちゃんと仲直りして朝ごはん食べておいで」
「おうさ。やっぱり、ここに来てよかったぜ。ダ・ヴィンチちゃん。サンキューな」
「そう言ってもらえるとダ・ヴィンチちゃん冥利に尽きるよ」
こうして彼は工房を後にしようと、出て行こうとして、ドアの前で立ち止まった。そして、振り返った。
まるで、何かを思い出したかのように。
まるで、何かを見つけてしまったかのように。
「う、うん？　なんだい？　用は済んだよね??　まだ何かあるのかい??　ジャ、ジャックちゃんは、ここにはいないって……隈なく探してみるかい??」
「……」
その件については彼は追及しないようだ。
もう、その仕込みはここでも終えた。今のやり取りをした時点で仕込みは終えた。
そんなことよりもだ。
「なぁ、ダ・ヴィンチちゃん。これはなんだ？」
「そ、それは……」
彼が工房を立ち去らなかった理由。
彼が手に取ったモノが彼の足を止めたのだ。
「な、なんだろうねー、ソレ……」
「お前が開発したお掃除グッズだよ!!　そうだよ!!　メイド・オルタに変な道具売りつけてんじゃねーよ!!　俺の部屋のトイレ吹っ飛んだらどう落とし前つけてくれる気なんだよ!!　こんなもんがあるから!!　こんなもん没収だ!!　後でカルデア警察にこさせるからな!!」
「ガッテーム!!?」

それは実在するかしないか噂されるカルデアの秩序を守る特殊組織。
その名を出されてはかの天才も叫ぶしかなかった。
彼は今度こそ工房を後にした。

☆

さて、残るは黒い聖女様のちっこい方。
ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリィとか長ったらしい名前の女の子を探すだけ。といっても、居場所は大体把握済みだ。
大それたことを云えば、彼女はすでに袋のねずみ状態だ。
彼のサーヴァントの隠密スキルが役に立ったのだろう。
「あれ？　マシュじゃん、おはよう」
「あ、おはようございます。英之介先輩」
それは思わぬ出会いだった。
あまり出くわしたくない相手だと言ってもいいだろう。この場合に限るが真面目な彼女と出くわすのは彼もバツが悪いだろうに。
ただし、子供たちそっちのけにしても興味をそそられるものがないと言えば嘘になるだろう。彼女は今朝、マスターである藤丸立夏と共に行動していなかったからだ。いつも、共に行動しているわけでもないが、朝一からどこかへ出掛けたマシュが気になったのは本当だ。
彼女は小さな休憩スペースのベンチに座って缶コーヒーを飲んでいた。
「つーか、お疲れ様？　立夏に伝言もせず朝早くから何してたんだよ??」
「あー、その事なんですが……」
マシュもバツの悪そうに頭をかいた。
「とりあえず、お隣どうぞ……」

「それじゃ、お邪魔しますか」
小さくて黒い聖女様の追跡は一旦中止して、彼はベンチに腰掛けた。
「あ、何か飲みます？」
「いや、自分で買うさね」
「でしたら、せっかくなのでフォウさんに選んでもらいましょう」
「フォウ」
「それ、おかしくね？」
小銭を入れた時には遅かった。
キャスパリーグが跳んで跳ねて自販機のボタンを押した。
ピッ。
ガコン……
ビタミンがたっぷり入ってそうな１５０ｍｌのペットボトルが出てきた。きっと、彼にビタミン沢山摂れと暗に告げているのだろう。
「それで？」
「はい？」
「いや、マシュは朝から何してたんだ、って話」
「あの、そのことなのですが……あまり英之介先輩にも話したくない案件と言いますか」
「ズバっと心にきたぜ、今の」
「あ、いえ、英之介先輩に話せば必ず協力してくださる案件なのですが、そうなると英之介先輩にご負担がさらに圧し掛かるといいますか、下手をすれば死者、この場合は英之介先輩が死んでしまいかねないと言いますか……」
「俺死んじゃうの!?」
だから、マシュは口を濁した。
彼を心配して、彼の身を案じて、たとえ彼がマスターでなくてもマシュは彼を気遣う、こともある。
「でも、本当に困ってるんだったら俺にできることなら何でも頼れよ？」
「はい、ありがとうございます。では、さっそくなんですが今夜お時間

ありますか？　英之介先輩にご迷惑をおかけになると思いますが手伝ってください」
「切り替え早いね、ちみ」
　その切り替えの早さに彼も驚くばかりだが。
「詳細は今ココで明かせません。その案件も手伝うというか、まずは相談というべきでしょうか」
「ふむ。人生相談みたいなものか」
「確かに人生を掛けた相談とも言えるでしょう」
「マシュたそと逢瀬……オラわくわくしてきたぞ」
「そういう冗談はほどほどに、この事はくれぐれも先輩や英之介先輩のサーヴァント達に悟られないよう、見つからないようにどこかで落ち合いましょう」
「難易度ちょー高っ」
　しかし、困った後輩を見過ごせないのが彼の美徳でもある。カンチョー如きに大人気なくなるパイセンではあるが。
　２人で密会する場所と時間はまた後でスマホで連絡入れるとのこと。
「あっ、もうこんな時間……」
「フォーウ……」
　時刻は午前７時５５分。
「……」
　彼は時計を見なかったことにした。
「それじゃ、私は食堂に行きますね。英之介先輩は朝ごはんは食べ終わったんですよね？」
「え、ああ、おお……そうだよ？」
「何故、疑問系なんですか……それじゃ、また後ほどお会いしましょう」
「フォウ」
　彼の返答に呆れらながら、マシュはその場を後にした。
「さてと……」
　そして、彼も動く。

☆

さて、カンチョーによって始まった聖戦も終わりを迎えようとしていた。
本当にどうでもいい話だが、それでも彼にとっては聖戦と呼ぶに相応しいメモリアル・ウォーになるのだろう、これは……
落とし前はつけなくてはならない。
そして、彼は勝利を確信していた。
彼はのんびりと時計の針を見つめながら、先ほどのベンチから一歩も動かず、ドリンクを飲んでいた。
「オルタちゃーん。そろそろ出てきたらどうだーい？　そこにいるんだろー??」
「……」
無人の休憩スペースから伸びる廊下の突き当たりにある女子トイレに向かって彼が独り言を言っているようにも見えるヤバイ光景だった。
「オルタちゃん、俺もくだらないことでキレて悪かったよー。反省したよー、だから仲直りをしよーよ。もうカンチョーさせろとか言わないからさー」
「……」
これっぽっちも心が篭っていない。
それでヒトを騙せると思っているのだろうか、ましてや相手はちいさくて黒くても聖女様だ。
「俺はねー、オルタちゃん。小学校の時にさー、イジメっ子にカンチョーされて、クラスメイトが周りにいてる中で我慢できず洩らしちゃったことがあるんだー。カンチョーって凄いよね。恐いよね。ウンコたれになるわ、臭いわ、イジメられるわ、もう笑っちゃうよ

ねー」
「……」
彼は勝つために己のプライドさえドブに捨てられる。
「その後、どうなったと思う？　学校を変え家を引っ越すまでそのイジメは続きましたとさー。男子からしつこくカンチョーされ続け、女子から避けられ、担任の先生も見ぬフリでしたー……ねえ、それ聞いてどう思った？　俺のことちょっとは可愛そうな奴と思った??思ったのなら、こっちに来て話そうよ。平和的に解決しようよー」
「……」
過去の彼がどうあれ、平和的にと彼が言うだけで不穏な響きにしか聞こえないのは何故だろう。
「オルタちゃん、ここで俺と仲直りしてくれないと、一生このままずっとずるずるカンチョーのこと引きずってしまうよー。だから、ね？　トイレから出てきて話し合おう。今なら俺の膝の上に座らせてあげるからさー」
「ろ、論理的に言ってそんなことで私が出て行くわけないですからねっ!!」
だけど、オルタ・リリィは反応してしまった。
「あ、やっぱりそこにいるんだな、オルタちゃん。だったら、俺がそっちに行ってやるよ」
「あ……」
ついに決着がつく。
彼のサーヴァントが暗躍していたことに気付かなかった子供たち。カルデアにはあちこちにサーヴァントの反応があるが、もっとも警戒しなくてはならないのは彼だ。彼を警戒するあまり、他のサーヴァント達が盲点になっていたというのもあるのだろう。
それと、もう一つ。
情報操作されたこということ。
情報を制した者が戦局を制するともいうように、彼はサーヴァントを使い、それっぽい噂をカルデア中に流したのは事実だ。「もう俺は怒ってないよ。仲直りしよう」と逃げ回る子供たちを見かけたら、そ

れとなしに伝えるように指示しておいた。
廊下ですれ違った食堂を後にした他のサーヴァント達（とりわけ安全な部類の）でも、カルデア職員達にそれとなく伝えておくだけでよかった。
ドクター・ロマンやダ・ヴィンチと会話していたのも、そのためだ。
あとは噂が噂を呼び、カルデアは広大だが噂のそれは予想以上に拡散され子供たちの耳に届き、子供たちは勝手に疑心暗鬼に陥るだけだ。
子供だから単純に騙せると踏んだのだろうけど。本当に彼は怒っていないのかな、と不安になるだろう。であれば、いつまでも隠れているわけにもいかない。情報を得るために、最終的に事の発端である人物の様子を伺いたくなるものだ。
もう、子供たちは彼の罠にハマっていた。
「やあ、やっと会えたね、オルタちゃん。俺は君に会えて嬉しいよ」
「そんな悪い顔で言っても嬉しくありません、エッチなトナカイ２号さん」
対峙する２人。
子供と大人。
サーヴァントと人間。
そして、彼らはお互いが切り札を用意していた。
「さあ、そこから出てきてお話をしようじゃないか」
「嫌です。信用なりません。私はここから一歩も動きませんもんね」
「やれやれ、そんなほっぺたを膨らましてかわいこぶっても駄目だぜ、オルタちゃん。年長者の話は聞くもんだ」
「でしたら、私をここから出してみてください。できますか？　貴方に」
「……」
それはお互いを分かつ境界線。
男性禁制、不可侵の領域に立つオルタ・リリィが一歩優位に立っていた。
「えっへん。トナカイ２号さんも流石に女子トイレに入ってくる度胸

なんてないでしょう」
「……」
　彼はふと、昔のことを思い出した。
　小学生の頃、まだイジメがなかった頃、彼が気になる女子にちょっかいをかけ、怒らせて追いかけられ男子トイレに逃げ込んだ時のことを。また、女子が彼にちょっかいをかけ、彼が女子を追い掛け回し女子トイレに逃げられた時の頃を、懐かしく思い出した。
　彼はふっ、と笑う。
「さあ！　どうしますかトナカイ2号さん！　このまま耐久勝負と行きますか！　まあ、論理的に言ってしまえばそうなっては勝負ありです！　何故なら、私のお尻を狙うエッチなトナカイ2号さんが女子トイレ前で悪い顔してるだなんて、すぐに誰かにバレてカルデア警察に通報されますよ!!」
「……」
「でも、私も聖女の端くれみたいなものです。今ならまだ許して……ってなんで入ってきてるんですかー!?」
「いや、話長いし」
　今の彼に恐れるものなかれ。
　彼は普通に女子トイレに侵入してちっこい聖女様を捕まえ、廊下に引きずり出すのであった。
「そ、そんな、私の完璧な作戦が……」
「ふっはっはー！　女子トイレにビビる男子がいてたまるかー！　オルタちゃんとイチャイチャしたいという気持ちが俺に勇気をくれたんだ!!　もっと触らせろーーー!!」
「なななななーーーーっ!?」
　カルデア警察のおまわりさーん、変態はこっちでーす。
「さーてフィナーレといこうじゃねーか。そこに隠れてるんだろ？　ジャックちゃんにナーサリーちゃん!!　君たちも俺のされるがままの運命なんだよ、出ておいでー!!」
　廊下の角からこっそりこちらを窺っているのは噂に引きつられてやってきた2人。主役は整った。

「あわわ、どうしよう。オルタちゃんが捕まっちゃった」
「お母さんを呼んできた方が……っ!?」
「もう手遅れだぜー、ジャックちゃん!! もっと周りを見て!! 君たちが助けを呼びに行ったらオルタちゃんがたいへんなことになっちゃうよー!!」
「あはははははっ、こしょこしょはらめれす～トナカイにごうさ～ん／／／」
手始めに、オルタ・リリィはこしょこしょの刑にあった。
「くっ、こうなったら実力行使でオルタちゃんを助けるしかないの……っ!!」
「そうだね。2人で同時にかかれば……っ!!」
「君達、人質の意味分かってる?? ほら、オルタちゃんがもっと酷い目にあうぜ～」
「わひゃひゃひゃひゃひゃっ、脇もダメなのでしゅ……／／／」
「ぐぬぬぬぬっ……」
サーヴァントである前に2人は子供だ。マスターの指示もなく、この絶望的状況下を突破することはできなかった。
そして、さらに子供たちに絶望が待ち受ける。
「よーく覚えておくんだな、ちみ達。あんまり俺を怒らせるとこうなるってことをさー。静謐(せいひつ)ちゃん、段蔵ちゃん、最後の仕上げだ、出ておいでー」
「はい、マスター」
「なっ!??」
「やっぱり、私たちだけじゃお兄ちゃんに勝てないっていうのっ!?」
こんなくだらない茶番につき……おっと失敬。
彼の忠実なるサーヴァントの2人がどこから音も無く現れ、ジャックとナーサリーの背後に回り獲物で完全に動きを封じ込めた。
静謐(せいひつ)のハサンともう1人、今回初任務の加藤段蔵の登場は子供たちにとって予想外だっただろう。
この場において、もう子供たちに戦意は残っていなかった。
「ふはっ、ふはははっ、ふはははっ、ふはははっ、ふはははっ、ふ

ははははははっ、ふはははははははっ!!」
何はともあれ、彼は完全勝利に高らかに笑った。

☆

されど、オチは必要だ。
今回も犯罪すれすれの彼の行為に天誅を下す者はやっぱりいた。
「貴様、そこで何をしている……??」
「……」
時刻は午前8時を回っていた。
当然、彼のスケジュールはびっしり詰まっていて午前8時からは確か朝の稽古だった。その、稽古担当のサーヴァントが冷酷な目で彼を射抜いていた。
メイドではない方の黒い我が王・アルトリア・ペンドラゴン・オルタの登場に場が静まりかえった。
ので、彼は高らかに笑うのをやめて、死んだ目で彼女を見返した。
「朝飯も食べに来ないで、時間通りに道場も来ないで、ナニをしているかと思えば……なにか、言い訳でもあるか?」
「ナニモゴザイマセン」
の、直後に彼に正当な制裁が下された。
ようは腹パンだ。
「ゴバババー!??」
「マ、マスター!??」
「あぁ、貴様らも同罪だな、静謐(せいひつ)のハサンに新入りのアサシンよ」
「え、私はマスターのために……っ!?」
「だ、段蔵も初任務を頑張っただけで……っ!?」
直後、2人の脳天に拳骨が落ちた。
「「きゅ〜」」
白目を剥いてノックダウンだ。

「さて、子供たちよ。アタランテやお前たちのマスターが心配していた。早く食堂へ行ってやれ。このバカは私が責任を持ってしごいておこう」
「「は、はーい」」
こうしてカルデアに平和が戻った。
というか、いつもと同じオチで落ち着いただけなのだけど。
まあ、子供たちの逆転勝利ということで聖戦の幕は閉じるのであった。

彼のお仕置きについて話せるなら話をするとしよう

さて、午前８時からはお仕置きの時間だ。
いや、なに、稽古に使う時間帯だったはずなのだが、犯罪一歩手前まで粗相した彼には罰が必要な訳であって……
場所は道場。
自称・天才のサーヴァントによって設けられた一施設に彼はいた。
我が黒い王の逆鱗に触れお仕置きを実行していた。
足ツボに効くぶつぶつのマットを敷いた上に正座をし、米袋５袋分の重さを軽く越えている重りを膝の上に乗せながら、熱いお茶が淹れてある湯飲みを頭の上に乗せた、なんともマヌケな刑が執行されていた。
そんな話になるはずだったんだ。
「こ、子イヌ～……アタシ、もうだめ……かも」
「……」
「トカゲのセイバー、私語は厳禁です、よ!!」セイバーッ
「ふぎゃー!?」
３０分後の話……
彼のお仕置きのはずなのだが……他の者が犠牲となった。もう少し噛み砕いて詳細を伝えれば、彼はお仕置きに耐えて、彼のサーヴァントが犠牲となったのだ。
「あ、足が、し、痺れて、子イヌぅ～……」
「……」
奴の名はエリザベート・バードリー。
クラスはセイバー。
反英雄ながら勇者気取りのサーヴァントが彼に助けを求めるも、今回は綺麗にスルーされ、本日の稽古内容に耐えられず罰を受けた、ということである。
「今、マスターは新境地に入ってるんです。話しかけないでやってください。それと、ここが痺れるんですか？　え？　ここですか??　ここがそんなにいいんですかー!!」セイバーッ

「の〝ぉおおおおーーーっ!?」
本日の朝の稽古は、彼の罰も合わせて1時間に及ぶ瞑想――――セイバーが集う道場でセイバーによるセイバーと彼のためだけの瞑想――――用はセイバー同士の我慢比べみたいなものである。
もちろんサーヴァント達は罰を受けた訳ではないので普通に正座のみ。
ただし、それすらもできなければ、あのポンコツ勇者のように監視役の謎のヒロインXである我が王にメーンされるのであった。
「ほらほらー、ちゃんと姿勢を正して新境地を開いて、くだセイバー!!」
「に〝ゅやぁあああああっ!?」
セイバーいじめを楽しむ我が王はさて置いて。
ここ道場には彼の朝の稽古を聞きつけてやってきたサーヴァントは数多いたりする。
ポンコツ勇者然り、今この場にいるのはクラス・セイバーがほとんどで……半分は冷やかしだったり、彼と共に心身を鍛えるためだったり、少しでも彼と接触するために欲望に忠実だったり、古今東西様々なサーヴァントが入り浸っているのが今の現状だ。
本来、朝の稽古担当であった黒い方の我が王・アルトリア・ペンドラゴン・オルタであったが、日に日に道場に顔出すサーヴァントが多くなり、無秩序に彼に接触を試みるサーヴァントを危惧した黒い方の我が王は、なけなしに謎のヒロインXである我が王を監視役に抜擢した、というちゃんとした理由があった。
「雑念のあるセイバーはこうです!!　えいやー!!」セイバーッ
「子イヌゥ〜……っ!!」
「……」
新境地に入っている彼の耳には届かない。
彼に助けを求め手を伸ばすも、それすらも手痛く竹刀で叩かれるのであった。
「流石です、マスター。段蔵も見習わなくては……っ!!」
「あっ、今誰か喋ったわよっ!!?　段蔵って言ってなかった!?」

「……」
……。それはたぶん気のせいだろう。
「はん、私には聞こえませんでしたね！　空耳なんじゃないですかー！」セイバーッ
「ほわぎゃーーーー!??」
「……」
ポンコツ勇者の発言は却下された。
「しかし、アレでまったく動じないなんて、英之介さんってホント何者なんでしょうね？」
「儂が惚れこんだ男じゃ、アレぐらいは平然とやってもらわんとな！」
「はぁ、英之介さんとゲームしたい……」
「しっ、奴に聞こえるよ。集中集中……」
「やっぱり誰か喋ってるわよ……っ!!」
「……」
新撰組隊長と第六天魔王、それとインフェルノなんたらに剣豪武蔵。彼や藤丸立夏に召喚された日本のサーヴァント達だ。２人、クラスがアーチャーが紛れ込んでいるが、気にしなくてもいいサーヴァントだろう。
ポンコツ勇者に標的が向かってる間はいつもこそこそと、喋っていた。
「な、なんのこれしき、英之介とふんずれもつれ……じゃなかった。手合わせをするためだ……ぐぬぬっ」
「あっ、やっぱり今聞こえたわ!!　私のライバルが打算してるわ!!」
「何をワケの分からぬことを言ってるんですか。マスターには指一本触れさせません。勿論、貴女もですよ、このポンコツ・セイバー!!」
「ア、アタシがポンコツ・セイバーですってー!?」
「……」
ポンコツ勇者が抗議をしようと立ち上がろうとするも、足が痺れて生まれたての小鹿のように脚を震わせるだけ。
そこを狙われ、横殴りの竹刀に払われ、見事ポンコツ勇者はこけた。
「正座、まさに悪い文明……」

「ほらっ。ほらっ!!　今のも聞いたでしょっ!!　正座は悪い文明だって……っ!!」
「そんなワケないでしょうに!!　正座は良き文明です!!」セイバーッ
「……」
　コケながらも匈奴（フンヌ）の末裔に指差すポンコツ勇者、エリザベート・バードリー。ついでに、ローマ五第皇帝にも指を差してやった。
　監督役の我が王は「ふーやれやれ」と言った感じで2人に訊ねた。
「貴女たち、喋りましたか？　そんなはずないですよねー??」
「「……」」
　……。
「ポンコツ・セイバー!!　彼女らは喋ってないですって!!」
「だからポンコツ言うなー!!　それに私は喋りましたってバカ正直に答えるわけないでしょー!!」
「……」
　もう、あれだ。
　この2人を道場から追い出したら万事解決する気がする。
　ポンコツ勇者は納得がいかない様子で、皇帝様の傍まで這いよって、そのモチモチした頬をぷにぷにした。
「よ、余は喋ってなどおらぬ……ッ!!」
「今喋ったじゃん!??」
　しかし、今のはノーカンだ。
「貴女がほっぺたをつつかなったら彼女も声を発さなかったんですよ!!　このウルトラ・ポンコツ・セイバー!!」
「ウルトラ～ッ!?　ウルトラって何よ!!　アタシはそこまでポンコツじゃないわよ!!」
「あ、今墓穴掘りましたね！　そこまでポンコツじゃないってことは、言い換えればちょこっとはポンコツだと認めた証拠ですよ、それは!!」
「う、うううるさーい!!　ポンコツポンコツ言うなー!!」
「……」
　なにやら物々しい雰囲気となってきた。完全にポンコツ勇者は瞑

想する気は無しだ……
「もう怒ったわ……」
「ほほーう、じゃあどうしますか？」
　ポンコツ勇者、ついにキレる。
「うわー、あやつ、どこからともなく竹刀を取り出したぞ沖田。なんと愚かな」
「ホント愚かですねー。あんな小鹿のように震えた足で謎のヒロインXさんを倒せる訳ないじゃないですかー」
「左様。しかしじゃ、今この場かりはアレよのう。特殊な陣形というか、正座をした儂ら障害物をどう上手く利用するかが勝負の決め手じゃな」
「あ、それゲームみたいで面白そうですね」
「そうじゃろ、そうじゃろう」
　うん、もう普通にお喋りしているサーヴァントもいるね。
　そんな彼らのことなどアウトオブ眼中な謎のヒロインな我が王とポンコツ勇者が衝突した。２人のサーヴァントが安全を考慮して手に持つ竹刀同士がぶつかり始めた。
　というか、いろいろおかしいよね。バトルが勃発し出したけど、瞑想中の他のサーヴァント達は微動だにせず正座のままだ。まして刑を執行中の彼もまた、微動だにせず新境地へ入ったままであった。
　我が黒い王も山の如し動く気配すらない。素晴らしい。
「さーさー、本日もやってまいりました。ポンコツ勇者ＶＳ謎の監督役Xのどうでもいい不毛な争いは、この儂こと第六天魔王・織田信長が実況を勤めさせていただくのじゃ！」
「ぐたぐた感ハンパないですが、瞑想中の暇つぶしにはちょうどいいですからねー。あ、じゃあ、私こと沖田さんが解説役って訳ですかー。でもノッブ、これ解説してる暇ないんじゃないですかー？　ほら、平然と罰を受けて可憐にもスルーし続けていた英之介さんがとうとう余波で吹き飛びましたよ??」
「マスター!??」
「おおっとー、暴走するサーヴァント達がマスターの近くでぶつかり

合っていたこともあり、流石のマスターもそれに耐え切れず吹っ飛んでしまったー!!　しかし、流石は儂のマスターじゃ!!　人望のあるマスターは壁に激突する手前で加藤段蔵に抱きかかえられ着地し、そして何事もなかったかのように瞑想を再開したじゃとー!!?」
「あ、オルタさんが足ツボマッサージに、先ほどの5倍はありそうな重りに、熱いお湯が淹れてあるポットを用意してますね。まだお仕置きを続ける気なんでしょうけど……というか、英之介さんの悪運ってメータ振り切ってますねー。まぁその分、サーヴァントを召喚する際、女性サーヴァントしか出ないんでしょうけど」
「というか、君達はよくもまぁこんな状況で暢気に実況なんてできるよね……」
　剣豪武蔵は呆れ顔で言った。というか、語り手である私はもういらない感じかな??　ぐだぐだな2人に仕事奪われた気分だ。
「さて、ポンコツ勇者の足の痺れが取れてきたのか、立ち回りが良くなってきたのじゃ。流石は勇者でアイドルを自称しているだけのことはあるのう。ダンスで培ったきたセンスでこの障害物をくるりとターンし、可憐に優雅になんでおどれらは儂を挟んで打ち合っとるんじゃー!!?」
「ぷぷーっ、良い気味ですノッブ。でも、アーチャーであるノッブなら謎の監督役Xさんに制裁受けることないでしょうに」
「あっ、ホントじゃ！　こんなに喋っててもセイバーされてない!!?
アーチャー贔屓されてこんなに嬉しい日がくるとわ是非も無いよねっ!!」
　もう勝手にやってればいいと思う。
　さて、彼らのぐだぐだ実況はこの辺にしといて、最後にこんな騒がしさにも関わらず目を閉じ美しくも凛と佇む2人の我が王の様子を窺ってみることにしよう。
　青の王と黒の王
　同じ顔をして別の側面を持つ彼ら。
　の、お腹が鳴っていた。
「……」

ぐぎゅる〜ってね。

彼よりも我が王の話をするとしよう

午前9時を回った。
「サンタさん、本当に大丈夫なの？」
「私たちが突然おしかけたらお母さん達もビックリしちゃうよ」
「いいえ、ロジカルに言って問題ありません！　今ノリにノっている私を誰だと思っているんですか？」
「ジャンヌ・スパム・ダルク・スパム・オルタ・スパム・サンタ・スパム・リリィだっけ？」
「ち・が・い・ま・す!!」
子供たちは朝から元気がいいね。
ナーサリ・ライムにジャック・ザ・リッパー、そして、2人の先頭に立って歩いているのはジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリィ・スパム……だっけ？
とにかく、朝ごはん時に彼と鬼ごっこをしていた子供達が管制室へと向かっていた。
「トナカイ2号さんには先ほどの借りを返してもらわなければなりません。それに、ナーサリさんの栞の件もまだ片付いていませんので」
「そうだった。私の大切なしおり、人質に取られたまんまだった。返してほしいの」
「じゃあ、お兄ちゃんを解体しに行こう」
廊下を歩く子供たち。
解体はともかく、これより9時半から始まる任務に連れて行ってもらうために、管制室に乗り込む気だ。理由は皆まで言わなくてもわかるだろうけど、カルデアでお留守番するのは子供たちにとっても退屈極まりないもの。レイシフトして素材やら種火やら、彼に悪戯する方が何倍も有意義な時間を過ごせるというものだ。
もちろん、ナーサリ・ライムのしおりの件も大事だ。
だから、今朝の件を蒸し返してでも自分達を連れて行ってもらえるように、ブリーフィング中の彼らの元へと向かった。
「ちょっと待ったー!!」

しかし、子供たちの前に立ちはだかる者が現れた。
「おやおや、これはこれはお嬢さん達、おそろいで。朝から元気がいいですね～」
「そういうルビーも、元気ありすぎるけどね。まぁそれは置いといて」
「相変わらずイリヤさんは手厳しいですね～」
「はい、そこー。関係ない話しない」
弁慶が立ちはだかったわけでもない。魔法少女2人組みが立ちはだかっただけであった。おまけに、魔法のステッキもようやく目が覚めたんだね。
「むっ、なんですか？　クロエさんに、イリヤさん。おまけに、ルビーさんとサファイアさんまで。貴女達、さては私たちの邪魔をしに来たんですか？　私達に今回のレイシフトを諦めろと??」
「そ、そんな……っ!?」
「か、解体するよ……っ!!」
カルデアにおける特異点にレイシフトするサーヴァントの上限問題。
女性ばかりだが増え続けるカルデアのサーヴァント達は、少なからず活躍する機会が減るものだ。レイシフト先で一番の花形は7つの特異点のどれかだろう。突拍子もなく突然沸き起こるぐだぐだな特異点やら素材やら種火集めのために現れた特異点など二の次で、しかし、彼らは少しでも活躍しようと、マスターのために命を燃やそうと、目立ちたいからという理由であったりもするが、自我が強いサーヴァントが多いせいか、お互いが譲り合うことができず、話し合いで解決できずに衝突することも、しばしあったりする。
が、しかし、どうやら今回は違ったようだ。私やサンタたちの思い過ごしであった。
「違うわよ！　周回行きたいんでしょ？　だったら人手が多いことに越したことがないわ」
「私たちも最近レイシフト連れて行ってもらえてなかったから抗議しに行く所だったの。でも、マスターさん達がオッケーしてくれるのって本当に気分次第だから味方は多い方がいいよね、ってクロエと話し

てたの」
「まぁ、アレですよね。子供5人で駄々をこねれば周回程度なら連れていってもらえるかも、って算段ですよ」
「姉さん、それは別に言わなくていいんじゃ……」
何はともあれ。
てれれてってて～ん。2人の魔法少女と2本の魔法ステッキが仲間に加わった。
「ロジカルにいって、とても心強いです！　皆さんで必ず成功させましょう！」
「名づけて『5人いればマスターもイチコロ！　おねだり駄々コネまくり作戦』よ!!」
最早、怖いものなんて子供たちになかった。
勝算があった。
最強の切り札は自分たちだ、という絶対的な自信が子供たちにあった。
自然と駆け足になった。
目的地は目の前だった。
「トナカイさんにトナカイ2号さん!!　ロジカル的に私たちを周回に連れてってくださーい!!」
だが、結論から言って、子供たちの願いは今回は叶うことはなかった。
目の前にある光景に、目を疑い、そして、子供ながらに現実ってやつを受け入れることになった。悟ったと言ってもいい。空気を読んだと言っても過言じゃない。
「マスター、てめぇふざけんじゃねーぞ!!　父上を周回に連れて行きやがれー!!」
「ぎゃーっ!?　モーさん、ギブギブッ!!」
「あのー、2人とも……ブリーフィング続けていいかな？」
恒例のブリーフィングは見ての通り進んでいなかった。子供たちの気も知らないで、彼らはホントいつも賑やかだった。
「今日こそ父上を周回に連れて行けよ!!　この前、約束しただろ!!」

「いや、ちゃんと連れて行ってるじゃん!!　オルタ達をさ!!」
「その父上じゃねーんだよマスター!!」
「じゃあ乳上のことかー!!」
「それでもねー!!」
「だったら謎のヒロインXの父上かー!!」
「ちげー!!　オレが言ってる父上は青い方の父上だー!!」
「それは立夏に言えやー!!　あっちのアルトリアのマスターは立夏だ!!」
「いや知ってるし!!　だーかーら、立夏に強く当たれねーからマスターにキレてんだろー!!」
「それおかしくね……っ!?」
　マスターである彼の胸倉を掴みぐわんぐわん揺さぶる、ブチギレモードのモードレット卿の姿に子供たちがドン引きして、管制室に入ることすらできなかった。
　ついに、サーヴァントにコブラツイストされる彼。
「つーか、なんでマスターはデコに矢が刺さってるんだよ。ふざけてんのか……っ!!」
「いてて、引っ張るな!!　これには海より深いワケが……って、だから無理に引き抜こうとするな!!　この矢は呪いの矢よりも恐ろしい矢なんだぞ!!」
　ブリーフィングより少し前に、どこぞの通りすがりのアタランテに天誅されたらしい。本物じゃなく吸盤が付いたオモチャの矢で射抜かれて、しかし、サーヴァントの腕力でも取れないときた。
　まさか、自称・天才サーヴァントが開発した超強力な接着剤の力が付加されていることなど知らず、無理やり引き抜こうとすれば、もうそれは想像するに恐ろしいことになりそうだ。
　当の本人は、ブリーフィングに顔を出しているが、笑わないように必死に笑いを堪えていたりする。
「どうでもいいけどよ、青い父上を周回に連れて行きやがれー!!」
「ぎゃー!??　矢が……取れたーーー!!?」
「あれ?　おかしいな、接着力が弱かったのかな??」

「てめぇ、ダ・ヴィンチちゃんも一枚からんでたんかーい!!?」
「英之介さん、血がオデコからドバーっておもしろいことになってますよ」
もう、勝手にやってください。そう子供たちの顔に書いていた。
「あれ、どうしたのみんな?」
「あ、いえ、お邪魔しました」
「「「「おじゃましました〜」」」」
欠伸をしていた藤丸立夏がこちらに気付いたが、もうここには用はないと、回れ右して駆け足で去っていく子供たちであった。

☆

さて、本題。
青い方の我が王の話をするとしよう。
モードレット卿があんなにも青い父上押しをする、アルトリア・ペンドラゴンという少女のお話だ。
かの有名な誉れ高きアーサー王。
しかし、カルデアではそんな王の存在さえ、影の薄いサーヴァントとして不毛に扱われる厳しい場所であった。
モードレット卿はそれを危惧していたのかもしれない。
いや、単にファザコンなだけだ。
「そもそも……そもそもだ、マスター。青い父上ってカルデアに来てから活躍したことあるのか?」
「立夏、あったっけ……??」
「え、あったと思うけど……たぶん、ありました」
ここではっきりさせよう。
私は彼らの活躍を初めから見ていたけど、青い方の我が王は大して活躍してなかった。

「フランスではどうだったんだよ、マスター？」
「立夏、どうだったんだ？」
「英之介さんとこのオルタずに全部おいしいとこ持っていかれましたー」
　そういえば、オルレアン城攻略は２人の黒い方の我が王の特攻によって壊滅したんだったっけ？
　それで、崩れて埋もれた這い出てきた黒い聖女様と目ん玉が飛び出た黒幕キャスターをフルぼっこにしたんだっけ??
　それで、その時、青い王はというと後方でワイバーンとちまちま戦っていただけだった……
「さ、流石はオレの父上だな。決戦でマスター達を城へ導いたってわけだ」
「ポジティブだな、モーさん」
「うるせーよ、マスター。他にもあるだろ？　ローマはどうだったんだよ??」
　オルレアン攻略の後、新たに召喚したサーヴァントはフランスで出会ったサーヴァント達が主だった。だから、藤丸立夏もフランス組である白い聖女様やマリー・アントワネット王妃の運用をしたくて、それで我が王も後方支援に回ってくれた。
　そして、彼に召喚された新人なジャンヌ・ダルク・オルタの独壇場だったような気がする。
「お、王とは本陣にどっしり構えて兵を動かすもんだよな。流石は父上だぜ」
「モーさん、顔ひきつってるぜ」
「うるせー！　次だ!!　第三特異点だったオケアノスはどうだったんだよ!!　青い父上も何かしら活躍したにちがいない!!　そうであってくれ!!」
　ところがどっこい。もうカルデアのお留守番組になっていた。
「お、お留守番だ、と……もう、その時期から??」
「ネロ達ローマ組みの試運転もあったし、敵がカルデアに襲撃してきた時の場合に備えて仕方がなかったのよ」

「それも重要な任務だと思いますよ、モードレットさん」
「そ、そうだよな。じゃあ、ロンドンは……」
「モーさんが一番知ってるよな」
ロンドンは、まぁ……いなかったことはモードレット卿も知っている。
否定したいが事実だ。否、もしかしたら霧のせいで姿が見えなかっただけでも？　とか考えちゃ駄目だ。それだと王としてあまりに影が薄すぎる。モードレット卿は脳裏に思い浮かぶも否定せざるを得なかった。
もう答えは出ていた。青い方の我が王はまたカルデアでお留守番をしていたのだ。
「それに、アメリカは……」
……。
「ちくしょう……っ!!」
「モーさん……っ!!」
モードレット卿はアメリカで起きた事件を思い出し、管制室を後にした。

☆

ちなみに、ブリーフィングはいつも通り不毛に終わった。ドクター・ロマンは泣いていた。